

新製品発売のご案内

[ESOTERIC名盤復刻シリーズ]

チャイコフスキー/ドヴォルザーク:弦楽セレナード

コリン・デイヴィス(指揮)

バイエルン放送交響楽団

シベリウス:ヴァイオリン協奏曲、ブルッフ:ヴァイオリン協奏曲
ラヴェル:ツィガーヌ、サン=サーンス:序奏とロンド・カプリチオーソ

チョン・キョンファ(ヴァイオリン)

プレヴィン(指揮)ロンドン交響楽団、ケンペ(指揮)

ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団ほか

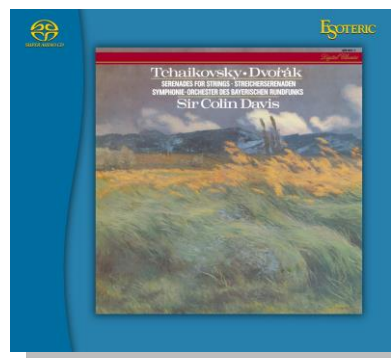
エソテリック(株)独占販売 2018年3月9日 発売

チャイコフスキー/ドヴォルザーク:弦楽セレナード

コリン・デイヴィス(指揮)

バイエルン放送交響楽団

- 品番:ESSD-90179
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222018
- レーベル:DECCA(旧フィリップス)
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:管弦楽曲



シベリウス:ヴァイオリン協奏曲、ブルッフ:ヴァイオリン協奏曲

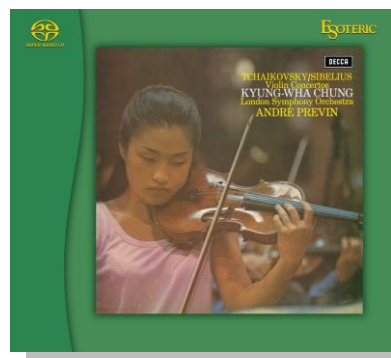
ラヴェル:ツィガーヌ、サン=サーンス:序奏とロンド・カプリチオーソ

チョン・キョンファ(ヴァイオリン)

プレヴィン(指揮)ロンドン交響楽団、ケンペ(指揮)

ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団ほか

- 品番:ESSD-90180
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222025
- レーベル:DECCA
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:協奏曲



□DSD MASTERING/Super Audio CD 層:2 チャンネル・ステレオ[マルチなし]

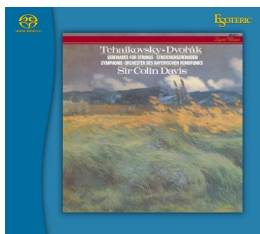
□美麗豪華・紙製デジパック・パッケージ使用

“Super Audio CD”と“DSD”は登録商標です。

エソテリック株式会社(代表取締役社長 大島 洋)は、「名盤復刻シリーズ」Super Audio CDハイブリッド盤2作品を発売開始いたします。

今回の作品は、定評の丁寧なマスタリング作業によってSuper Audio CD化され、音質の向上はもとより、作品が本来備えた音楽的魅力を改めて浮き彫りにし、新たなる感動を約束するものに仕上がっています。この2作品はエソテリック株式会社の独占販売で、主にオーディオ販売店で販売されます。

[アルバムの特徴]



チャイコフスキー/ドヴォルザーク:弦楽セレナード

コリン・デイヴィス(指揮)
バイエルン放送交響楽団

仰ぎ見るような壮大さ！バイエルン放送響の弦楽セクションから暖かく重厚な響きを引き出す名匠デイヴィスの手腕が刻印された名盤。あの「ベートーヴェン序曲集」に匹敵する名録音、ついにハイブリッドディスク化。

■ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。ドイツの名門バイエルン放送響では、すでにクーベリック指揮の「モーツァルト:交響曲集」、ドヴォルザーク:スラヴ舞曲全曲、「ウェーバー:魔弾の射手」という 3 枚の名盤をリリースし、ご好評をいただいております。今回はそのクーベリックの後任として同響に着任したコリン・デイヴィス指揮による 1986/87 年録音の「チャイコフスキー & ドヴォルザーク:弦楽セレナード」を世界で初めて Super Audio CD ハイブリッド化いたします。

■レコード・ファンにもお馴染みのコリン・デイヴィス



Photo: Decca / Hansjoachim Mirschel

イギリスの指揮者コリン・デイヴィス(1927.9.25-2013.4.14)といえば、1960年代のアナログ全盛期からフィリップス・レーベルの看板指揮者として、ベルリオーズのオペラ・声楽曲・管弦楽曲、そしてモーツァルトのオペラの高水準の録音を網羅的に手掛けたことで日本の音楽ファンにもおなじみの存在でした。イギリス人らしい気品と節度ある解釈と、その雄弁な指揮ぶりに表されていたともいえる燃えたぎる情熱の高揚とを極めて高度な次元で併存させた演奏は、ベルリオーズの溢れんばかりの才気や古典としてのモーツァルトの格調の高さをダイレクトに伝えてくれるものでした。グリュミオーやヘプラーとの協奏曲録音での巧みな伴奏でも個性を発揮し、1970年代

には首席客演指揮者を務めたポストン響(シューベルトのザ・グレート、シベリウスの交響曲全集、ムソルグスキー「展覧会の絵」、そしてアムステルダム・コンセルトヘボウ管(ハイドン、ドヴォルザークの交響曲集、ストラヴィンスキーの三大バレエ)との名盤を連発し、レコード・ファンを大いに喜ばせたのでした。

■デイヴィス真の円熟を刻み込んだバイエルン放送響時代

そんなコリン・デイヴィスが 1983 年に 56 歳でバイエルン放送交響楽団の首席指揮者に就任した時、それまでドイツのオーケストラとの録音が少なかったこともあって、周囲を驚かせつつも大きな注目を集めることになりました。クーベリックがこの地位を退任し、その後任に予定されていたキリル・コンドラシンも急逝したことで、それまでこのオーケストラと良好な関係を保っていたデイヴィスに急遽白羽の矢が立てられることになったのです。そしてデイヴィスが文字通り真の円熟期を迎えるのがこのバイエルン放送響時代でもありました。フィリップス・レーベルへの録音は継続しながらも、新興のドイツ ORFEO のほか、CBS と RCA というアメリカの老舗名門レーベルとの契約も結び、シンフォニーからオペラにいたるまで、それまでのデイヴィスが録音してこなかった曲目を中心に、極めて充実したディスコグラフィを築き上げることになりました(並行してドレスデン・シュターツカペレ、ロンドン交響楽団との録音も行なわれました)。デイヴィスの音楽作りも著しく深みを増し、陰影を加え、そして何よりも際立ったのは、ドイツ人の指揮者以上に遅く重厚なテンポと厚みのある響きで作品をスケール大きく構築していく手腕でした。バイエルン放送響も、クーベリック時代には聴かれなかった、熟した濃密な響きを獲得し、クレンペラーの雄大さとボルトのノブールさが緋い交ぜになったようなその演奏は、まさに巨匠コリン・デイヴィスの到来を告げるものでした。

■あの名録音「ベートーヴェン:序曲集」と同一スタッフによる録音

デイヴィスとバイエルン放送響の録音といえば、1985 年録音の「ベートーヴェン:序曲集」が日本のオーディオファイル・ファンのレファレンス・ディスクとして高く評価されていますが、この「チャイコフスキー&ドヴォルザーク:弦楽セレナード」はその翌年と翌々年に、全く同じ会場(このアルバムにクレジットはないものの、ヘルクレスザールと思われます)、録音スタッフ(ヴォルフラウム・グラウル、マルティン・ヴェーア)で収録されたものです。このころのバイエルン放送響のさまざまな録音が、レーベルは違えども、ほぼ同一の優れたサウンドとイメージを保持しているのは、録音自体がバイエルン放送局との共同制作で行なわれたため、録音に携わったスタッフが録音会場の音響特性やオーケストラの響きを知り尽くした放送局のプロデューサーとエンジニアだったことが大きな要因といえるでしょう。プロデューサーのヴォルフラウム・グラウルは 1951 年ライプツィヒ生まれで、1978 年から 2014 年までバイエルン放送局の音楽プロデューサーを務めていました。ベルリン芸術大学でトーンマイスターのみならず指揮も学び、現在では指揮者としても活動している才人で、同放送局の名プロデューサーとして著名なヴィルヘルム・マイスターらと並び多数の録音をプロデュースしています(放送局の枠外のプロデュースも多数手掛けています)。マルティン・ヴェーアも同放送局のエンジニアとしてパイロイト音楽祭のバイエルン放送交響楽団の生中継などを手掛け幅広く活躍していたエンジニアです。

■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

録音は 1950 年代からミュンヘンの録音会場として使われ、その優れた音響で知られるヘルクレスザールで行なわれました。1986 年にガスタイク・フィルハーモニーが出来るまではバイエルン放送響の定期演奏会もすべてここで開催されており、フィルハーモニーにメインの演奏会場を移した現在でも同響はこのホールでのコンサート・シリーズを開催しています。1,800 人以上を収容できる典型的なシューボックス形式のホールで、細部をマスクしすぎない適度な残響感、高域から低域までバランスのとれた響きの 2 点で、録音には最適であり、このアルバムでも、デイヴィスがバイエルン放送響から紡ぎ出す厚みのある弦楽合奏のぬくもりや質感の高さが潤いのある響きとともに見事に捉えられています。音楽の流れが決して途切れず、また決して刺激的にならない、文字通り「完熟」のサウンドが、心技一体となったこのコンビの蜜月ぶりを伝えています。もともとデジタル収録であったため、初出以来一度もリマスターは行なわれることがなく、今回の Super Audio CD ハイブリッド化がほぼ 30 年ぶりのリマスターとなります。Super Audio CD ハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、



最終的な DSD マスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特に DSD マスタリングにあたっては、DA コンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整された ESOTERIC の最高級機材を投入、また MEXCEL ケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

[収録曲]

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

弦楽セレナード ハ長調 作品 48

[1] 第 1 楽章 ソナチネ形式の小品 アンダンテ・ノン・トロッポ・アレグロ・モデラート

[2] 第 2 楽章 ワルツ モデラート(テンポ・ディ・ヴァルス)

[3] 第 3 楽章 エレジー ラルゲット・エレジアーク

[4] 第 4 楽章 フィナーレ(ロシアの主題) アンダンテ・アレグロ・コン・スピリート

アントニン・ドヴォルザーク

弦楽セレナード ホ長調 作品 22

[5] 第 1 楽章 モデラート

[6] 第 2 楽章 テンポ・ディ・ヴァルス

[7] 第 3 楽章 スケルツォ(ヴィヴァーチェ)

[8] 第 4 楽章 ラルゲット

[9] 第 5 楽章 フィナーレ アレグロ・ヴィヴァーチェ

バイエルン放送交響楽団

指揮:サー・コリン・デイヴィス

[録音]1986年10月15日～16日(1-4)、1987年1月5日～8日(5-9)、ミュンヘン

[初出]422 031-2 (1988年)

[日本盤初出]32CD811(1988年4月25日)

[オリジナル・レコーディング]

[プロデューサー]ヴォルフラウム・グラウル

[バランス・エンジニア]マルティン・ヴェーア

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説]諸石幸生 歌崎和彦

[企画・販売]エソテリック株式会社

[企画・協力]東京電化株式会社

[アルバムの特徴]



シベリウス:ヴァイオリン協奏曲、ブルッフ:ヴァイオリン協奏曲 ラヴェル:ツィガーヌ、サン=サーンス:序奏と Rond・カプリチオーソ

チョン・キョンファ(ヴァイオリン)
プレヴィン(指揮)ロンドン交響楽団、ケンペ(指揮)ロイヤル・フィルハー
モニー管弦楽団ほか

作品の本質に鋭く切り込むチョン・キョンファ全盛期の凄まじいヴァイオリン。鮮明なデッカ・サウンドの最も理想的な形での世界初ハイブリッド化が実現。

■ ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤をオリジナル・マスターから DSD マスタリングし、Super Audio CD ハイブリッド化を実現してきました。韓国の名ヴァイオリニスト、チョン・キョンファ(1948.3.26~)の 1970 年代の 3 枚の LP から選曲した 1 枚を世界初 Super Audio CD ハイブリッド化で発売いたします。

■ 類稀なる名手チョン・キョンファ

チョン・キョンファは韓国ソウルに生まれ、12 歳で渡米、ジュリアード音楽院で名教師ガミアンに師事してその才能を開花させました。1967 年、19 歳の時にレーヴェントリット・コンクールでズーカマンと第 1 位を分け合ったことで大きな話題を集め、その 3 年後、1970 年にアンドレ・プレヴィン指揮ロンドン交響楽団と共演してヨーロッパ・デビューを果たし、「ジネット・ヌヴェー以来、最も素晴らしいヴァイオリニスト」と絶賛され、センセーションを巻き起こしました。同時に英デッカと録音契約を結び、ヨーロッパ・デビューと同じプレヴィン指揮ロンドン響とチャイコフスキーとシベリウスのヴァイオリン協奏曲を録音してレコード・デビューを果たしています。それ以来 1987 年まで 17 年間にわたってデッカ・レーベルに室内楽を含む 17 枚のディスクを録音。その後 EMI に移籍し、さらに 2005~2010 年まで指の故障で長期療養した後に復帰。2016 年はバッハの無伴奏全曲を録音し、コンサートでも披露するなど、息の長い演奏活動を続けています。その長い芸歴の中で、自らの芸風も変化させてきたチョン・キョンファですが、彼女の名をまず世界に知らしめ、その芸術の神髄を記録しているのは、やはり 1980 年代初頭までの録音といえるでしょう。

■ 1970 年代のチョン・キョンファの神髄

当ディスクは、1970 年代にアナログ録音された 3 枚の LP からチョンの代表的名演を当シリーズのために独自に選曲したものです。シベリウスは上述の 1970 年録音のデッカへのデビュー盤となったもので、チャイコフスキーとのカップリングで発売されたもの。ブルッフは同じスコットランド幻想曲との組み合わせで発売されたチョン 2 枚目の録音。サン=サーンスとラヴェルは、1977 年に録音された 7 枚目のソロ・アルバムにして、それまで協奏曲の大曲ばかり録音してきたチョンにとって初めての小品集となった LP から採られたものです。この時期のチョンの演奏の特徴は、何と言っても作品に憑依したかのような凄まじい求心力を持っていることでしょう。体当たりの情熱、豊かな感情の起伏、切れ味の鋭い技巧、そして鮮烈なまでの音色など、ヴァイオリンという楽器を極め、さらにそれを超えたところで音楽の深さを垣間見せてくれるヴァイオリニストとしてのチョンの本質が音として刻み込まれています。シベリウスは清冽かつ純粋なこの音楽の本質を突いた名演ですし、ブルッフでは作品に盛り込まれた深いロマンティズムをごく自然に引き出しています。サン=サーンスとラヴェルはヴィルトゥオーゾとしてのチョンの凄さが最も直接的に味わえるもので、音楽の変化に沿って千変万化するその音色の多彩さを聴くだけでも、彼女の才能の一端に触れられましょう。

■華麗な共演者のラインナップ



共演者の充実ぶりも特筆すべきもので、シベリウスでは、当時イギリスで爆発的な人気を誇っていたアンドレ・プレヴィンとロンドン交響楽団が十全にバックアップ。合わせもの巧者としてのプレヴィンの上手さが発揮されています。この後EMIがメイン・レーベルとなるこのコンビの初のデッカ録音でもありました。ブルッフでは、ロイヤル・フィルおよびBBC響の首席指揮者を歴任してイギリス楽壇でも大御所的な地位にあったドルフ・ケンペの指揮が聴きものです。そして小品では、これまた合わせもの上手で、一時期チョンとも親密な関係にあったシャルル・デュトワが起用されています。

■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

録音は全て1912年に建立されたロンドンのキングスウェイ・ホールで行われました。SPの電気録音最初期の1926年からデジタル録音が始まっていた1984年まで、オーケストラ、合唱、そしてオペラ作品の録音に引っ張りだこだった、ロンドンのもっとも有名な録音会場であり、その深みのある優れたアコースティックは数多くの名録音を生み出しています。ヴェテラン・プロデューサーであるクリストファー・レーバーンとレイ・ミンシャルがプロデュースを担い、ホールの音響特性を知り尽くしたデッカのチーフ・エンジニア、ケネス・ウィルキンソンとジェイムズ・ロックがエンジニアリングを担い、ヴァイオリン独奏を細部まで明晰に捉えつつ、後ろに広がるオーケストラのスケールの大きなサウンド・イメージが巧みに再現されています。歴史的な名録音だけに、CD時代初期からリマスターされ、一部は「栄光のロンドン・サウンド」による24bit/96kHzリマスターやシングルレイヤーのSuper Audio CDとしても発売されてきましたが、今回のSuper Audio CDハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的なDSDマスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特にDSDマスタリングにあたっては、DAコンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整されたESOTERICの最高級機材を投入、またMEXCELケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

■『芸術の女神に身を捧げるような弾き方に胸がときめいてくる』

◎シベリウス

「特にシベリウスはすばらしい。繊細を極めた音色、すばらしいリズム感、豊かな感情、各所に閃くセンス、実に心をそそる演奏である。プレヴィンのバックもすっきりとした新鮮さを純粋な音楽性で包んでいる。」(『レコード芸術』1971年4月号、推薦盤)

「1970年のロンドン・デビューでセンセーションを巻き起こした直後にレコーディングしたチョン・キョンファのデビュー盤である。燃え立つような激しい情熱の全てをぶつけたようなヴァイオリンで、新鮮で強烈な衝撃を与えたレコード。厳しいほどの緊張感が全曲に漲り、並々ならぬ意欲のほどがうかがわれ、楽器がまるで体の一部であるかのような、確固たる自信に溢れた演奏でもある。この逸材の実力を十二分に発揮させたプレヴィンの指揮も高く評価されよう。」(長谷川武久、『レコード芸術別冊 クラシック・レコード・ブック 協奏曲編』、1986年)

「高い緊張感を保ちながら厳しい姿勢でシベリウスの孤高の旋律を歌いあげている。プレヴィンの指揮は響きの美しさと格調高い表現が際立つとともに、チョンのソロを絶妙の呼吸で支えている。」(岡本稔、『クラシック不滅の名盤800』、1997年)

「このコンチェルトの清冽さ、純潔な厳しさ、凜としてデリケートなニュアンスを、チョンぐらい見事に表出した例はない。彼女は音楽と完全に一体になっている。他にも名盤は多いが、それらは曲とは離れた名技、名表現というのがほとんどだ。ところがチョンの場合は、いったいどこまでは作品の魅力で、どこまでがヴァイオリニストの魅力なのかははっきりしない。彼女をほめればそれがそのまま曲への賛辞になってしまうのである。」(宇野功芳、『ONTOMO MOOK クラシック名盤大全・器楽曲編』、1998年)

◎ブルッフ

「チョン・キョンファの演奏は、感受性に充ちた、楚々として心を添える音と表現を持ち、冒頭からして惹かれるが、気持ちをいっぱいに入れてクレッシェンドされると、身体ごと曲に没入し、芸術の女神に身を捧げるような弾き方に胸がときめいてくる。老朽ケンペは、いかにも味の濃い、スケールの大きい、充実しきった指揮ぶりでチョン・キョンファを包んでいる。」(『レコード芸術』1973年4月号、推薦盤)

「まだ二十代前半の若さでありながら、完全に成熟した音楽を聴かせていたチョン・キョンファの初期のスタイルを伝えているものの一つで、作品の性格から行っても強烈な個性を表面化させたものではないが、ケンペ=ロイヤル・フィルとの均衡のとれた美しさが魅力だ。」(藤田由之、『クラシック不滅の名盤800』、1997年)

◎ラヴェル、サン=サーンス

「近年の彼女は、このレコードに明らかなごとく、表現の幅が広がってきた。これは大きな進歩である。サン=サーンスとラヴェルは、明快でのびのびして、いかにも快い。ヴァイオリンをリズムカルに歌わせる点で、抜群の才能に恵まれている。」(『レコード芸術』1979年12月号、推薦盤)

「(ツィガーヌは)ラッサンの第1部の絞り出すようなG線の音に、チョンの心の声が聴かれる。それは胸をかきむしるようなすごい音色で、ジブシーの哀愁以上のものが漂う。フリスカではすべての表現が天才の証であり、リズムの間や巧みな節回しが唾然とするほどものを言っている。」(宇野功芳、『レコード芸術別冊 クラシック・レコード・ブック 協奏曲編』、1986年)

[収録曲]

ジャン・シベリウス

ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品47

- [1] 第1楽章 アレグロ・モデラート
- [2] 第2楽章 アダージョ・ディ・モルト
- [3] 第3楽章 アレグロ・ノン・トロポ

マックス・ブルッフ

ヴァイオリン協奏曲 第1番 短調 作品26

- [4] 第1楽章 前奏曲 アレグロ・モデラート
- [5] 第2楽章 アダージョ
- [6] 第3楽章 フィナーレ、アレグロ・エネルジコ

モーリス・ラヴェル

- [7] ツィガーヌ

カミーユ・サン=サーンス

- [8] 序奏とロンド・カプリチオーソ 作品28

*チャイコフスキーの楽曲は収録しておりません。

チョン・キョンファ(ヴァイオリン)

1-3: アンドレ・ブレヴィン(指揮)ロンドン交響楽団

4-6: ルドルフ・ケンペ(指揮)ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団

7-8: シャルル・デュトワ(指揮)ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団

[録音]

1970年6月(1-3)、1972年5月(4-6)、1977年4月(7-8)、ロンドン、キングスウェイ・ホール

[LP 初出]

1-3: SXL6493(1971 年)

4-6: SXL6573(1973 年)

7-8: SXL6851(1979 年)

[日本盤 LP 初出]

1-3: SLC2000 (1971 年 3 月)

4-6: SLC2310 (1973 年 3 月)

7-8: SLA1228 (1979 年 10 月 21 日)

[オリジナル・レコーディング]

[プロデューサー]クリストファー・レーバーン(1-3、7-8)、レイ・ミンシャル(4-6)、

[レコーディング・エンジニア]ケネス・ウィルキンソン(1-3、7-8)、ジェイムズ・ロック(4-6)

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説]諸石幸生 長谷川勝英

[企画・販売]エソテリック株式会社

[企画・協力]東京電化株式会社

エソテリック独占販売

エソテリック特約店にてお求めください。エソテリック特約店につきましては弊社ホームページの「製品展示・販売店のご案内」または「AVお客様相談室」へお問い合わせください。

ホームページ 製品展示・販売店のご案内 <http://www.esoteric.jp/support/shop/>

AVお客様相談室

受付時間:9:30~12:00/13:00~17:00(土・日・祝日・弊社休業日を除く)

0570-000-701(ナビダイヤル) PHS・IP電話からは Tel 042(356)9235/Fax 042(356)9242